

【目的】 家族の一員として同居している老人に対して、子供(孫)の目から見た老人の食生活を調査した。その結果、前報では、拡大家族、核家族における食品出現頻度を老人の嗜好度と子供の嗜好度から、若干の相関が見られ、老人の存在に関わらず子供中心の食事内容であることが認められた。そこで、本報では子供の食生活に着目し、同居老人を含めた家族の食生活が、子供の嗜好から影響力を受け、それに伴って老人にも嗜好変化がみられるかどうかを比較検討した。

【方法】 愛知県K市在住の小学生女子70名(8才~12才)を対象にアンケート調査(聞き取り調査)を行った。家族人数、食事内容、外食回数など合計14項目について、子供自身と子供から見た老人の食生活を中心に検討を行った。

【結果】 魚介類と肉類の、嗜好度と摂取頻度の項目に対して、子供は拡大家族、核家族とも肉類を好む傾向がみられたが、摂取頻度については、拡大家族の子供の方が、魚介類を多く食べていた。また、外食回数をみると老人の有無によって外食頻度に差がみられた。平成8年国民栄養調査結果と同様に高齢者は外食に対して否定的であった。また主な外食場所に対して、ファミリレストラン、回転寿司などが多くみられる等、子供が好み、外食場所の選択権が与えられるなど子供中心の食生活がうかがわれた。更に検討を重ね、現代の同居家族における子供と老人共存の食生活あるいは、食生活習慣について調査を続けたい。